

歌人・竹尾ちよと奈良①

□ことばを愛しむ □

な ら 民 俗 通 信

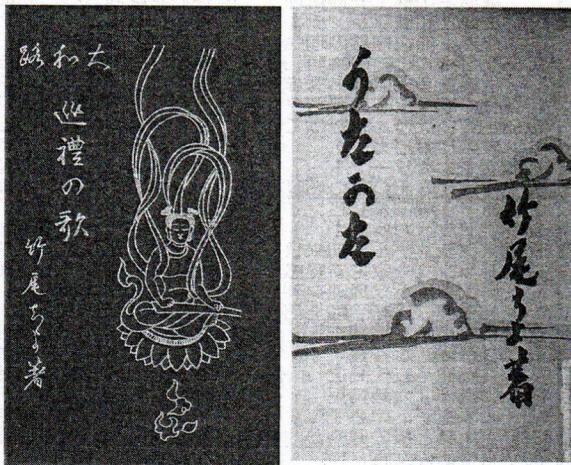
□269

勺 稔子

▼愛読された『大和路
巡禮の歌』

竹尾ちよ（1890年）
1990年）という歌人
がいた。會津八一が隨筆
「歌材の仏像」の中で、
「奈良には、もと竹尾ち
よといふ人があつた。あ
ちらでは誰知らぬものも
無いほどに有名な歌人
で、『うたかた』『大和
路巡禮の歌』などの歌集
もあり、地もとに出来た
絵葉書に、この人の歌を
刷つたものが、いろいろ
あつたりして、東京にも
相当しられたものであ
る」（「婦人公論」昭和
17年4月号発表、「渾齋
隨筆」昭和43年中央公論
美術出版社収）と紹介
たほどである。

大正14年に刊行された
『大和路巡禮の歌』（奈
良市橋本町　木原文進堂
発行）は、會津八一直筆
の歌と序を表頭に別刷り
し、コロタイプ製版で刷
れた。



竹尾ちよ歌集。左が『大和路巡禮の歌』、右が『うたかた』（表紙・富本健吉）

師へ

▼新書判程度の手軽さを兼
ね備えた美しい歌集で、
当時和辻哲郎の『古寺巡
礼』と共に愛読、携行さ
れて版を重ねた。

▼那須野から奈良女高

られた大和の仏像を本文
の随所に配置しつつも、
新書判程度の手軽さを兼
ね備えた美しい歌集で、
当時和辻哲郎の『古寺巡
礼』と共に愛読、携行さ
れて版を重ねた。

大和の方言に深い感銘

て来て、ちよを悩
ませたのが「方言」
だった。「みちの
くの玄関口」、那須
野が原に生まれ、
「『イ』と『エ』
の区別の出来な
い、だんべーこと
ぱで育つた」とい
うちは、「常に
人の前に耐え難い
複雑だ。後年「方言」そ
れを私は、うどんじるも
のではない。それは、そ
の地方の人にとっては皿が
大きいのに、古い言葉が
たくさん埋もれている」
と言われ、「那須」には
に遷元せぬようにとも
と言われたちよの気持ちは
確かに見れば良い態度だと
思う。しかしそれでも自
分は此の道を行くという
八一の心理は、一筋縄で
走り切れない。
それでも奈良を愛しつ
づけ、奈良を詠み続けた
一人の歌人のあしあと
を、今しばらく辿(たど)
つてみたいと思う。
(しゃく・ね)――歌人

明治26年8月、栃木県
那須郡福原（現大田原市）
で漢方医の家系に生まれ
た竹尾ちよは、宇都宮高等
等女学校2年たつた14歳
の春、「歌」というものの
芽生えめいたものが私
胸に培わはれたよ。こひの瑞々しさを私は生
涯忘れることが出来ない」と振り返る歌集（尾
上柴舟『静夜』）に出会い
その後、難闘を突破し
て奈良女子高等師範学校
の小倉遊仙があり、交友
の同級生には、日本画家
の関西人からすれば、
「あ」もまた立派な方
関係は晩年まで続いた。
▼木綿と綿ごしの違い
あこがれの奈良にやつ
て、こっちの人は綿糸
だけね。きぬこし豆腐と木
綿ごしのちがいだね」と
言われたちよにとって
は、切実だっただろう。
さらに、卒業後、母校
宇都宮女への赴任が決
まり、国語学者・春日政
治から、「栃木県という
歌壇の庄隅にせよ、宣
伝がましいことをされる
のは好まない」（松山ち
よ歌集『反照』序・田林
義信による）と言つたと
いう矜持（きょうじ）が、
彼女を自ら好んで「忘れ
られた歌人」にしたかも
しれない。

このことは、こんなに有能の
歌姫にして、その品
位を保ち、その暖昧を仄
めらかさで、「あ」と指
されるその山々も関東の
それに比べておだやかな
たたずまいを見せて居
ると感じ、「正しい美しい
ことば」を使いたいと
泣ける程つしみ集』
つた（「佐保会」、会報
大正6年に卒業した國
語漢文部5期生20名ほど
の小倉遊仙があり、交友
の関係は晩年まで続いた。
▼木綿と綿ごしの違い
あこがれの奈良にやつ
て、こっちの人は綿糸
だけね。きぬこし豆腐と木
綿ごしのちがいだね」と
言だら思つたが、奈良
を訪れた那須の母から、
「わしのことばは木綿糸
のやうに重ねた」といふ
たとえが記されている
（「こひは愛しむ」昭
和46年）。
▼忘れられた歌人
冒頭の會津八一の隨筆
で、竹尾ちよは、その後、
結婚して松山ちよとな
り、国語教師として大阪
や兵庫で教鞭（きょうべ
ん）をとり続けた。50代
から80代にかけては再び
歌集や隨筆集を出したた
く、ときには「歌人と称さ
れるのが嫌なことだ」
とあります。歌壇の庄隅にせよ、宣
傳がましいことをされる
のは好まない」（松山ち
よ歌集『反照』序・田林
義信による）と言つたと
いう矜持（きょうじ）が、
彼女を自ら好んで「忘れ
られた歌人」にしたかも
しれない。

このことは、こんなに有能の
歌姫にして、その品
位を保ち、その暖昧を仄
めらかさで、「あ」と指
されるその山々も関東の
それに比べておだやかな
たたずまいを見せて居
ると感じ、「正しい美しい
ことば」を使いたいと
泣ける程つしみ集』
つた（「佐保会」、会報
大正6年に卒業した國
語漢文部5期生20名ほど
の小倉遊仙があり、交友
の関係は晩年まで続いた。
▼木綿と綿ごしの違い
あこがれの奈良にやつ
て、こっちの人は綿糸
だけね。きぬこし豆腐と木
綿ごしのちがいだね」と
言だら思つたが、奈良
を訪れた那須の母から、
「わしのことばは木綿糸
のやうに重ねた」といふ
たとえが記されている
（「こひは愛しむ」昭
和46年）。
▼忘れられた歌人
冒頭の會津八一の隨筆
で、竹尾ちよは、その後、
結婚して松山ちよとな
り、国語教師として大阪
や兵庫で教鞭（きょうべ
ん）をとり続けた。50代
から80代にかけては再び
歌集や隨筆集を出したた
く、ときには「歌人と称さ
れるのが嫌なことだ」
とあります。歌壇の庄隅にせよ、宣
傳がましいことをされる
のは好まない」（松山ち
よ歌集『反照』序・田林
義信による）と言つたと
いう矜持（きょうじ）が、
彼女を自ら好んで「忘れ
られた歌人」にしたかも
しれない。

このことは、こんなに有能の
歌姫にして、その品
位を保ち、その暖昧を仄
めらかさで、「あ」と指
されるその山々も関東の
それに比べておだやかな
たたずまいを見せて居
ると感じ、「正しい美しい
ことば」を使いたいと
泣ける程つしみ集』
つた（「佐保会」、会報
大正6年に卒業した國
語漢文部5期生20名ほど
の小倉遊仙があり、交友
の関係は晩年まで続いた。
▼木綿と綿ごしの違い
あこがれの奈良にやつ
て、こっちの人は綿糸
だけね。きぬこし豆腐と木
綿ごしのちがいだね」と
言だら思つたが、奈良
を訪れた那須の母から、
「わしのことばは木綿糸
のやうに重ねた」といふ
たとえが記されている
（「こひは愛しむ」昭
和46年）。